

<研究発表 I 広島県>

『生活の中から課題を見付け、
自分の生活をよりよくしていこうとする生活実践力の育成』
～学んだことを創意工夫し、生活に活かすことができる授業の創造～

発表者 福山市立御幸小学校 教諭 服部 優子
福山市立御幸小学校 教諭 岸本 宗久

1 はじめに

本校は県東部にある全校656名の学校である。田園地帯にあるが、郊外型大型スーパーの進出により団地宅地の開発が進み、児童数はここ数年どんどん増加している。

学校教育目標は、「豊かな心を持ち主体的に学びたくましく生き抜く子ども」である。福山市の国語科・家庭科の研究指定を受け、安定した生活の上に豊かな確かな学びが育つと考え、「確かな学び」を国語科で、「安定した生活」を家庭科で育成していくことに重点を置き、3年計画で研究を進めてきた。

2 主題の設定

～家庭科の今日的な課題～

- 家族とのふれ合いが減っている
- 伝統的な文化や生活習慣の伝承がされにくい
- 生活経験不足、誰かのために働くという中で得られる成就感、ほめられる喜びを味わうことが少なくなった

～めざす子ども像～

- 生活の中で課題を見付け、解決しようとする子（関心・意欲、主体的な学び）
- 多様な情報から必要なものを選択し、活用する子（知識・技能）
- 学習で身に付けたことを生活に活かす子（生活実践力）

(1) 1年次の研究

研究主題 『学んだことを生活に活かす家庭科授業の工夫』

家庭科から始まり家庭に戻る題材構想の工夫をすることにより、家庭に目が向くようになり家庭生活への関心が高まったが、自ら生活をよりよくしようとする生活実践力については不十分であった。

(2) 2年次の研究

研究主題 『衣・食・住の基礎基本を明確にし、知識・技能の定着を図る授業の創造』

本物（コンテンツ、実物見本、プロの技）との出会い、技能表（スキルカード）の活用、くり返し学習により知識・技能の定着を図る授業の研究をした。

(3) 3年次の研究

研究主題 『学んだことを創意工夫し、生活に活かすことのできる児童の創造』

3 研究への取組

- (1) 学習モデルに基づく学習展開（見つめる→分かる→できる→活かす→まとめる）
「見つめる」では家庭に目を向けてスタートし、「わかる」「できる」で、家庭で活かせるだけの知識・技能を身に付けさせる。そして「活かす」では家庭や生活で実践し、「まとめる」で、再度家庭科学習の全体をふり返りよりよい方向性を確認する。
- (2) 家庭実践を含む年間指導計画の立案
子どもたちの実践意欲への意識がとぎれないように計画的な指導を心がける。
- (3) 生活実践力を支える取組
 - ・「働くこと」というキャリア教育の視点や、家庭科を支える基底的な力をつけるという視点から、マイワークに取り組む。
 - ・食育推進計画を作成し、全学年・全領域における家庭科関連単元を意識した指導を行う。

4 研究仮説

家庭生活と関連させ、子どもたちの内発的動機付けを高め、生活実践知を形成する授業を創造していけば、学んだことを創意工夫し、生活に活かすことのできる子どもが育つであろう。

5 実践事例（詳細は、研究紀要参照）

6 学年「よりよい食事を工夫しよう ～わが家の名シェフ～」

(1) 指導の工夫

- ・内発的な動機付けを高めるために
学習課題をつかみ、追求活動へつながるゆさぶりのある授業
達成感や満足感が得られる授業
友だちや家族から認められる授業
- ・生活実践知を形成するために
実物や科学的データの提示による科学的な認識
問題解決プロジェクトを実行できるだけの技能を身に付ける授業
「自分は」「わが家では」と、考えることのできる授業

6 成果

- ・自己課題の決定から、問題解決のプロセスを学ぶことができた。
- ・グループのメニューの試食、家庭実践の報告会によりお互いを認め合うことができ、児童の達成感、満足感がさらなる家庭実践への意欲につながった。
- ・パソコンでのシミュレート、プロ（栄養士、保護者、ボランティア）からの学び、スキルカードにより、生活実践知の形成、技能定着につながり、家庭実践への自信となった。

7 課題

- ・個々の家庭実態が違うため、家庭の協力が得にくい児童の実践率が低いので、家庭との連携と児童の相互評価や、教師による評価を綿密に行っていく。
- ・環境整備、スタッフの充実が技能定着につながるので、年間を見通したボランティアティーチャーの活用ができる体制づくりをする。
- ・継続した家庭実践につながるマイワークの評価を工夫する。